

松窓乙二發句集

序

わが松窓は奥ゆかしきみちのくにに生れて、師としつかふる人もなく、いにしへをさぐり、いまをかうがへて、俳諧のみなもとにさかのぼり、おほよそあづまの國には、母指人指のごとくかぞへあげられて、はや人のさつま潟にも名ひびき聲とどろきたる叟になんいましける。末期ちかき頃家集いできにたれど、世にはまれくなるうへ、四時のながめさへおぼつかなく、梅のあたりにきちかうをとこへし咲みだれ、千鳥鳴夜の荒磯に蟬うぐひすなんどまじらひて、屏風繪のごとく見きく人のわづらはしきをうちなげき、一具古翠のまめ人類題して小冊とはなしぬ。あはれこのふたりは松の下陰にひととなりて、世にゆるされたる寫瓶のうつはものになんありけり。

多代女

松窓翁生涯所咏。凡二千餘什。今之所抄者。僅七百餘。翁好遊歷。與羽二州。來往無虛日。其在松前函館。通前後殆七八年。所得最多。偶有涉京畿者。多是想像寄興。總集羈旅之作。

十居五六。今多略之。將待他日別編其遺也。

一具愚春識



松窗乙二發句集上

春の部

陸月問のあるとし(別本此下に「武さしの友人に申おくる」とあり)

元朝の不二ふたつ見んうらやまし
年立や團十郎がふくべより

(芭蕉の四山瓢此頃は團十郎の所藏に歸せりと云)

春や祝^上嵯峨にて向井平二郎
江戸より歸て草庵の立春

旅寐せし春はむかしよ武藏坊
松前よりかへき玉之亭に齋菜買
ふころよりありて、三とせの草
枕に老に老をかさねし書懷。

春立ぬ山にすみれは摘もせで

一具巻一具
蕉雨亭古翠 輯

所は塩釜法蓮寺とおぼしくて

初夢や訪へば出さるゝ桐火桶
御降もまれなる數に覺へけり

袖が崎仙臺太守公の別莊にわが
片倉君に陪從して、

屠蘇なめて來る人よみな國の聲
日映萬年枝

夜明ればみな蓬萊の草木かな
万才の留守の妻子やめし時分

江戸に春を迎て香妻橋より眺望

萬歳ものぼれ筑波の朝南
母のある陸月七日の寒かな
小鳥啼門も野町の子日過
七草や馬屋祭の猿もゆく
老が身は齋屑にもをとけり

錢さげてあらはしたなや齋買
親と子の間にこぼるゝ齋かな

かの草を打はやす事もたきなら
はしの嶋にあるに、雪さへいと
どふりかゝりければ、

齊なら垣根草ならなかりけり
芹提て出たりな鶯の住家より
旅すればわれさへ嬉し畑芹
霰迄降約束 歟若菜の夜

赤湯の里

うら白もある山もとの若菜かな
御忌鐘死なぬ薬もありときけ
佐保姫といふも正月言葉哉

上野

さほ姫のたぶさの風か少しづゝ
あの畑はしつけぬ麥かどんどやく
しのぶの奥にて

梅さけば茶の實植ると聞日哉
日のくれぬものにして置け梅花

物ふりぬ梅の鳴子の鳴るあたり

巢光が繪かける惠比壽大黒の贊

むつまじき神の宿にはうめの花

かはる瀬の月の輪わたり梅花

(別本「奥の細道に、月の輪の

わたしを越すとある所也」と

前書あり)

子を呼に出て子をつれて梅夕

老備

梅に月待れて出るもうとくし

ひとりつゝ起揃ふてや梅の宿

梅の花これや小家は繪にもかく

む月十五日赤湯の里に添ふてゆ

くことあり。鹿の香流も氷の袂

ひまなくうちて、さらに春とは

おもはれず。

大歩に月日を願へうめの花

鬼貫や井戸のはたなる梅花

むかし誰か旅寐はじめて梅に鳥

如月二十五日普神法樂

きのふ見しころには似ず梅の花

今朝虹をかけしともいふ柳かな

へなたりをへなくと吹柳かな

春もまだ子のさびしがる柳かな

兜巾着て見れば淋しき柳かな

青柳の中より見たり朝ぼらけ

十日ほど旅する朝の柳かな

七草の秋にあへとて柳さす

芽柳を見ぬ人のいふ寒かな

正月の下戸くより来る柳かな

花椿鬼門射る矢のむけ所

月させどよくくくらき椿かな

前天寺道にて(別本「目黒みち」)

木がくれし人鶯よく

鶯の飛かたに心うつりけり

鶯や田づらから来て見えすなる

反古焼て鶯待ん夕心

うぐひすの初影うつる紙帳哉

幽栖

鶯や茶刀さげて出るあるじ

鶯やはらみ雀はくるしい歌

鶯をふくや小城のあまり風

うぐひすや物の芽をはむ心なき

ちる梅の片空かけて鳴雲雀

朝雲雀聲寒からぬさむさ哉

雨になく尾長鳥もこれや春の鳥

さう鳴は嬉しい事ははるの鳥

途中

旅心こまかにおもへ蜩賣

春の朝蜩はくるき物ぞかし

この物をふみに出て

蛤や波つまづけと並べ見る

春立てまだ九日といふより足た

たぬ病に臥して彌生過るにもい

まだ靴をもたげず

蛭子とも波をはなれし蛸とも

行方も海苔柴多き月夜かな

海苔柴も風がふくぞや朝ぼらけ

のり汲ば鷗來るなりちらほらと

海外(函館松前の事なり)

若草や野に立る木もない處

春草にそつと置たし我芽

はるくさのかぎりを見ばや山のうへ

春草によき夢見るかはなれ家

草の戸や狗子草も萌出る

雪解や近劣する妹が軒

ふんばつて解ぬ氣になれ松の雪

山彦もぬれん木の間ぞ雪半

搗木といふ所は木もなくて尤

(最力)高き頂也。吹風身をさく

がどく塞けれど、老てはますま

す壯なるべし。

雪分る我をたとは霞む鬼

木のほやも霞残さぬ夕かな

霞戸や死んだふりしてけふも寐ん

かすむ日やあまき物くふ布留の里

霞事忘れてゐるか梢ども

落馬せし去年の山路の霞哉

水呑て哀さめたり八重がすみ

東風ふくや笹が嶋の注連はりに

夕東風の上ずりやすき名古屋哉

春の風市の月夜の身にそはね

吹ためて風は置やら春ごころ

病中吟

春の雨心はぬれて古郷へ

知恩院

御法會の埒もとらぬに春の雨

春雨や木間にみゆる海のみち

鶴などはとしよるものを春の山

當盤崎鬼子公別莊

はるの山にとりまかれてぞ住れける

手習に越しはむかし春の山

明るより扇さす日やはるの山

ふる事をおもひ出で

烏帽子着て白川越す日春山

隣から南へむくやはるの水

翌の夜は満月さそへ春水

山と水春にして置ところかな

法務の世をのがれんとおもふ

年、ものへまかりて、

とくくとし身の春さそふ山水歟

春の夜や袂の鬘斗をおもひ出す

春の夜の爪あがり也瑞巖寺

砂川に足跡みゆるはる日かな

遅き日に着たら倦うぞかくれ蓑

伊勢にかしこき長官何がしの米

字の譚の句を同じ國の人より乞

れて

遅き日の神代に似たる翁かな

鬘斗むきも覗く門とて日の遅き

六里來て田を打あたり中尊寺

泥つきてゆかし慈姑は何の玉

髭白髪おもひは春にうとまれし

去年の秋もこのあるじのもとに

ありて、七夕やひらふて戻す蚕

が繭といひしが、此國をさすら

ひて又こゝの初霞をかぶ

鶯が春柳の繪の松はありふれし
手のひらに汐すくへとや春の宿
暖になれば春なし七重濱
寐て起ておろかや是も春心
難追てすぐにこがるゝ男猫哉

(別本上五「難追て」とあり)

土筆風の小松もうらやます
正月や忘れてあれば袖の月
二月のあれ三日月がく
如月や起はぐれしも朝ぼらけ
如月の梅見し夜より袖の月

鶴老人が子を送て黒澤尻迄とて
うち出ぬるは晦日の日也けり。

つきならす秋は龍のごとく、草
霞むみちたひらにて、和山越し
たるよりもさすがに心つよし。

二月をのがしはやらじ老二人
又嬉し二日灸も過し春

家に七ツになる三郎もちぬ

夜は夜とて忘れぬ八巾の置處

飯粒も春は來にけり八巾
八巾まだつめたい歟山の空
八巾の尾に驚きなれし家鴨かな
乙の子の生れ日くれて春の月
加茂へ來て捨火の沙汰も春月
まゝしきは荒野の雲よ春の月
長嘯が鼻かむ春の月夜哉
接穂した木もなし酒もなきあたり
木鏃のおそろしげなりつき穂時

四ツ谷ならねど紙草履はきて山
下より川口とめぐり詣る夢のう

ちに

薺にも花さくあたり六あみだ
拾ひ子や薺の花の夕ぐもり
菜の花の中や手に持獅子頭
蒲公英や一日にみやる莖と花
あぶくま川をわたりて
なぐさみや茅花あつめて枕にす
小鳥等が餌も有けなり茅花原

酒折は十日もおそし植る菊
蘆の芽に肝つぶしてや居ぬ千鳥

留主の軀はさぞ親髪みだれて

藪蔦の芽にいひ出すか歸る事
木の芽くふ小鳥も待ばまたれけり
残月に心もなくて飛つばめ
巢乙鳥のきげんそこねる嵐かな

露なしの里片倉氏の別荘にて

(別本「鬼公子の別荘」とあり)

待ば來るきゞすの外は松の風
鶯の日は暮にけりきじの聲
江の空や歸らぬうちは雁のもの

琵琶湖に題す

月のある夜を唐めきて雁の行
雁よけも春ぞ名取は古郡
小田に降雨見てもひく小鴨哉
雀子や家のうしろは淺茅原
子を呼 賦雀の聲の太くなる
踏苔の匂ふさうなりなく蛙

麻の種三粒持てもなく蛙
海苔喰に鼠は来るになく蛙
親のおやも有けるものかなく蛙
長生をすするも詮なし藁
包れてしづまる蛇や白い紙

老ても春はうれしくて

飯蛸の飯より多し遊ぶ事
廣大なことで泣れず涅槃像
涅槃像ひまゆく駒も見ゆる也
蝶鳥や死ぬ日が先きになる佛
雛の君吾妻下りをなされける
江の西の桃折越しぬ江の東

このあたりにはわづかに草の萌
出しのみにて、梅は露ほどの蒼
をもてり。殊にみちとせの名あ
る花は、三日のけふに咲あはせ
たるもなきけしき也。

雛しらす桃又しらす雛の貌

上野

古郷にくらぶれば散さくらかな

さりとは齢かたぶく櫻かな
有明は雪になりしさくら哉
志賀寺やさくらに犬の二人扶持
準繩に美しうちるさくら哉
つゝじが岡にて

遠山のしたしき花の木間かな
花散やつぼくと鳴る水の奥

草庵

花の香に出ては鼠の暮いそぎ
花に乞食増賀の衣着てありく
花さくや朝めしおそき小商人
ことしも病を身とし草を枕とし

て

何所の花どこの芝居か死どころ
花の雪衾かぶりし夜に似たり

途中

庵にみゆる花の山風吹にけり
花守の無沙汰か小田の片あらし
なま中につゝじ咲てぞ山ごゝろ

さきの世は朱雀の鬼かつゝじ賣
山吹や荒鷄に暮を見せに出る
佐藤庄司が丸山の館址にのぼる
酒こぼせ董の外は山の草

傾城贊

赤人の目には董か寐る一夜
庵を出て一日程

入れば入我も出羽の雲に鳥
小づれとていそがしけなり歸る雁
垣根田の蘭も刈そめや夏の來る
春ををしむ

さほ姫も幾度けふをふりむくぞ

江戸にて

羅漢寺のものど成けり春の暮
面買てくれて子は寐て春のくれ

夏の部

更衣根つかぬ松ぞものたらね
人中へ朝日さしけり更衣

途中吟

鶯にあはぬ日はなし拾時
拾着て参りぬるなり文使

江戸にありて別本「こぞより江
戸にありて、花にきさらぎの十
五日も、つゝじに彌生の晦日も

暮て」とあり

御佛の生れしけさや不二の山
ころんだを繪に見て久し鍋祭

清水をふみ、茨の香を傳て、雲居
禪師のすみ給へ(ひ)し山に詣。

壺の茶のとうから盡てむかし寺

我家は

水二筋夏花そゝぐと田へ行と
夏書せん絃なき琵琶のうら表
短夜の満月かゝる端山かな
みじか夜を雨降鳩に明にけり

酒田高野のはまにて

よる波の砂に濁りて夜短し
みじか夜や山の咄しが水になる
短夜を寐たや牡丹の花のうへ
鶯に散すましたる牡丹かな
物の露落るも嬉し牡丹越し
村雨や寐る宿ならばかきつばた
西寺の西日かすりぬかきつばた
をし水によこれぬけしの苔かな
花芥子や空もかざりになればなる
作寺に錢なきころやけしの花
けしに須彌入れし心よ露の月
禰宜殿に馬もかられず麥の秋
穂に出れば一品くだる田麥哉

太田原を出て

旅衣なす野のいちごこぼれけり
山もとは日照雨ふるいちごかな
櫓つむそこらあたりの若葉かな
若葉風ふくや提行馬の脊

卯の花に氣の毒がるやめくら馬
卯の花の暮も見がてら茶振舞
麥ふみし人の卯の花さきにけり
茨の花ちりぬるをわが岡の家
名残なく花吹なくす茨かな

二十八年(別本「四十八年」)を
へて谷地にいたる書懐

小手まりや白髪としらで昔見し
橋のつぼむとくさきむかしかな
常盤木の天心なる落葉哉

松島に行異兆法師を忘れず山の
下流迄送る

松葉散竹筒は酒の盡やすき
松の葉のかへれば來れば軒にちる

出羽のゆき、關文がもとにて

長翠佛苗五寸を見て白川を越し
より、予が庵を出羽のゆきへの
中やどりとして、沙羅の聲に草
鞋をとくはじめていく度といふ
もしらず、あるは松島の初日を

ながめ、葛の松原にさくら咲方を
を枕として、覺英僧都を想像し、
忍山には秋の日の暮てもくれぬ
その影をしのびしも、今はむか
しのかたみ草となりぬ。予もさ
いつとし宮館に病て死なてはか
なくも生のびしが、身は老、命
は露ながらいまだ歩行神のはな
れず、此塚に来て涙をこぼすは、
濁りにしまぬ葉の上に向ひあは
せするも遠からじとおもへば、

松ぞ散ひとり言いふ膝の上
茂りけりどの家見ても庵らしき
神鳴るを出てきく家や夏木立

酒田日和山眺望

風筋は熱海あつみに成て郭公
時鳥初音せし夜の法蓮寺
降あめに位つけたりほととぎす

梁川竹隱居

ほととぎすまだ曙のすみれかな

あぶくま川

時鳥鳴ならしほれ釣の糸
不二見ゆる所や朝の閑古鳥
露を見て居ればなくなりかんこ鳥
妻のある隠者あはれぬ(めカ)閑子鳥

邊郷

鶯の老にくらぶる老もなし
白川の田植見て來よ鳴水雞
水雞なけ水乞鳥はくるゝ也
有明をおのが夜にして鳴水雞

乙二とはをうなめきたる名なり
といふ人にたはぶれて

鐵漿拾に出れば草のほたるかな
ほたる火や雀が家の竹のかげ
山の端の空も螢もよあけかな
ほたる火や屋根よりこける苔のおと
鬼灯の花は暮たに飛ぼたる

松島に隣る名の、象潟の田とな
りしを、あらずきかへして、憎
れわざするは、そも何のすく世
ぞ、とさみだるゝうちにおもひ

つゞけて、

降雨のほたるともなれ小百姓
蝸牛淺茅に花の咲をまて
山風の吹ぞ葍のかたつぶり
蚊ひとつに青空ちかきゆふべかな
蚊に起てお貌さびしや彌勒佛
苗の色蚊のなき里のやうす哉

秋田の湊にありし頃

出る月のおそしはやしや蚊屋に入
母の亡がらを棺にをさめまゐら
せて

煙さへとゞまるものを麴の中

五月五日接引精舎にありて

我眼には薬降日も雨の露
投こんで見たき家なり笹粽

酒田にて

古郷をおもはぬふりぞ粽とく

象潟の風景みな砂に埋れし前の
年なりけり、酒田に下りてあや
めふく日にあへ(ひ)ぬ。ことし

またはからずもこゝにさすらひ
てけふにあふ。

曾てこの粽ときしが粽とく

仙府にありて

粽とかで雄島の僧はいなれける

海外にありて(函館の事なり)

このやうにあやめ葺いても寒かな
あやめふけ日白の不二の暮ぬうち
あやめふけ鶴を飼ふ宿のなまぐさき

山里のならひに

葺とはや霧ふきかけるあやめ哉
戸明れば今朝の影さすあやめ哉
古妻やあやめの冠着たりけり

眞山を假山とする人の家にて

(別本「河道上人の院内」と前書

せり)

五月雨や葉守の神もおはす庭
龍宮でつく鐘の音敷五月雨
五月雨の芒むらく夜の明る
さみだれの水雞鷺尾長鳥

やどりせし戸のひまより青き葉

の見ゆるは何の木ともわかず

入梅に來て鳴は不斷の小鳥かな

種ひてず麥まかぬ函館松前に四

とせありて、鯉が深に歸郷の舟

あがりせしあくる日、山添に田

を植る人を見る。されば道のか

たはらに捨置たるすら、あまき

露ふる蓬萊の草のこゝちせられ
て、

嬉しさはこれにもたりぬあまり苗

さくら花ちりぬ早苗の風祭

緒絶の橋の其爪がもとに行に徳

一といふ山根を過て

苗とるも植るもひとり子もひとり

宮岡を出て木戸のうまやに近き

西に時島山といふをゆくくみ
る

片乗りになる鴉の戸や苗のみち

行前の茶店よりこの山を望む

代かきがよくしる雪よ月の山

蟹の泡鬼のめしなどいふを

紫陽花にあらぬ名をよぶ山家かな

あぢさゐや仕舞のつかぬ晝の酒

紫陽花ややがて地をふく風の前

蛸満寺

苔ふみて花にもなさず岩根道

水かけて明るくしたり苔の花

かたばみの花の宿にもなりにけり

かたばみの花雨降となく雀

簾に居つかて朴の木のは頭
いたきものなれ

南天の花こぼるゝよ腹のうへ

雄勝峠を越る時

夏霧にぬれてつめたし白い花

我影の寐やうとするぞ夏の月

山の井にあす迄のこれ夏の月

山人は山草刈れやなつの月

六月朔津輕玉之享

手にのせて氷見る間を朝衍

氷賣年寄日ではなかりけり

とんぼ追ふ影と念佛申聲の眼と

耳をはなれぬ南無道元小法師

なでしこと今朝見しを佛の子

餘の草は名もないやうに野撫子

成美が幼き娘の一めぐりに申つ

かはす

其親にその子とゝきし合歡や咲

あはれげもなくて夜に入藜かな

草の庵あかざの闇のかはりけり

山家の夏といふ和歌題を得て

爪木撫る日をさて置て菰植る

粟時やわすれずの山西にして

蓮一葉うくや嬉しきものゝ敷

蓮の糸蓮の莖ともながめけり

六田を前に野田の渡りをあとに

して

麻とてはまれに蓬のまがりみち

不足ぞとおもふ朝なし麻の露

麻刈や水乞鳥を見て歸る

二人の孫とわらふく六皮半に

むきて

瓜喰て蟻に引れな木陰まで

瓜の皮下手にむかせて竹の月

雨の草瓜の鳴子もそれながら

世忘れにはしり入り青すゝき

青芒涼しき闇のほのか也

夢南法師(一具の前名也)と石住

といふ奥山家にとまりて

皂角の花の香をのみ吹あらし

ある行脚予が淡の格菴を尋來り

ければ殿に行先をしめしやると

て

水の粉のふき散方へ往てやどれ

水飯やあすは出て行草の宿

川風の千鳥おもふや心太

蝶鳥のまゝ母らしや梅を煮て

さます事煮梅にならん子の寐起

鮮なれよ松をかぞへてくるうち

鮎すしに藻をかり初の宿りかな

稻妻の一夜に甘し酒の味

(別本「一夜になりぬ」)

曙の春を見せたし竹婦人

掛香や心ときめく行蓮ひ

晒井や餘所へ家鴨をあつらへる

さらし井やおもひ紛れし苔の露

秋田湊

雨をとまなひ、雨に伴れて、此地

にますらひしより、小鯛と鳥賊

賣聲も十日斗絶て、又十日ばか

り過ぬ。あはれ妻さへくらくて、

たゞ海の鳴のみをきく。

百合清水山路ゆかしき折もあり

朝の間に見てゆく野路の清水哉

村中の鏡くもるにわくしみづ

妻と子が大事の清水にごしけり

これは娘は縁ならずして家に

歸り家刀自は病にあやうき時

の句也

酒田より秋田の湊へゆく蓬底に

起臥して、汐越にかゝる夕、海

士が家にひとしき客舎にうつる。

老が身をしたひ來にけん舟の蚤

久保田の旅窓あくるあした

蚤のあと消る迄見ん筑波山

中尊寺經堂を守る老法師はいき

さかする人にて

紙魚わかぬついでに蚤の咄しかな

書窓

赫夜姫紙魚の行方ぞ覺束な

あつまれば一度に憎し物の蠅

酒呑のうるさがるなり蠅はちき

蝙蝠や秀衡殿の油さし

山鳥は人ひく鳥よ蚋のさす

子子よ蝶になるさへにくきむし

秋田の浜に、つくしの乙澄とと

もに假寐する頃、浪にぬれ露に

しほれ來し旅衣ほす日なくて、

雌鹿山も鶉も見ず成りぬ雨つゞき

夕やけのさむるにはやし鶴川人

はなれ鶴の羽黒の山は日暮たり

夕けしき鶉の足水にはじまりぬ

鶉匠らがひたとぬれたり小夜嵐

鶉匠らが濁りしといふ夜川かな

鹿の子く山風ふくぞ寐に歸れ

鳩の中走りぬけたる鹿子かな

むかしより仙臺に國分侍といふ

あり山もと近き所にすむ。そ

の家をのぞくに、

照射にはいづれの弓をすゞけ弓

盃をあぐるもの、程(舊字脱カ)

を抱くもの、棋をかこむもの、匂

を案ずるもの、芍薬の徑を傳ひ

來て酌とるもの、花笠の紐むす

びたれてをどり出るもの、是は

これ城北山莊のあそびなり。

けふのこと扇に書にあまりけり

あぶくまや扇拾ひし去年もくる

をのここのさくらにしたり團扇の繪

露臭くなりぬべらなり汗拭

夏羽折鶴の郡をのしありけ

中尊寺

帷子を着て寒がりぬ御僧達

かたびらや風のそばへる舟のうへ

嘉右衛門はかたびら時の畫書かな

鶯のうしろ見らるゝ暑かな

蔦の葉を引さいてみる暑かな

さびきつて鏝(砒カ)のあつし砂のうへ

出羽より越路にいたる山中水無

月六日の陸

莫大に降雪見たる鶯敷

風かをる暮や鞠場の茶の給仕

脛高くかゞげし人も風薫る

龍宮園

八大龍王すゞしさうにて小淋しき

涼しくも見えず大工の筆硯

途中彌彦山を仰ぐ

草枕神もすゞしと御らんぜよ

字考亭

土用東風天の川より吹やどり

夕立にすはや心の太山たみやまめく
夕立につれたり山の木草賣
夕立やつかねて捨し藍の色
井に落す硯もやがて夏の行
風さそふものゝみ多し御祓の具
白雲や茅輪くどりし人の上
妻と子が茅輪くどるよ目に見ゆる

小千谷にありてみな月盡日

松窓乙二發句集下

秋の部

朔日の禮からいふやけさの秋
本莊にて立秋の夕

すり曲し蠶にも月をまたれけり

秋をさだむるはじめとは七夕の
夜を翁も申されし

立秋もまことしからね六日まで

途中立秋

けふからは星の草なり野撫子

法と願と、糸による心のすぢの
ひとしければ、

七夕の夜も餘所にせず西東

七夕や拾ふてもどす蟹が櫛

新潟より海越の佐渡山を望む

一具菴一具軒
蕉甫亭古翠

小木の間の婆々もかすらめ唐衣
星合や白き袴に更る人

大筒客舎

やがてうつ碓の槌も星今宵
ほしのうた覺る事にせざりけり
高き木に花もあれかし星の戀
すゞしさを願の糸の吹たまる

母の喪にこもりける頃

喪の家をはやくかたぶけ天の川
天の川月の鬼ははや西す
天の川田守と咄す眞上かな

鐵船が魂を祭る

我造る茄子の馬に乗て來よ
月さして歸るもありぬ墓參

灯籠が消ても来るや水もらひ

他に三とせ寐て(別本「やみて」)

五とせぶりにて古郷の盆會をい

となむ。

我箸も孛殻にかぞへまぎれけり

しらゝ迄こゝろをやりて扇置

一杯の茶もほのふし扇おく

ひなびたる聲と、あれたる宿と、

並居たる人の涙と、ひとつ所に

あつまりたる哀をさし覗きて、

木槿さけくくとや梓呼

浅茅さく宿ぞ木槿の花も咲

病すこし心よければはこ館より

松前へうつる留別

朝貌に立出る身はむくげかな

舜やけさは八月十五日

朝貌に北窓せばき住居かな

蚊屋しらぬ蚊よ朝貌の花一つ

へり行や月と酢瓶と朝貌と

信濃川のほとりにて

小萩さく川上見よとさす船敷

疊にも萩の匂ふ歌蟻の来る

うらむとは小萩が申葛のこと

文月四日文卿がともがらと木下

よりかへさ、あやしの家にやす

らひて、

親にのみ蚊屋つる家ぞ萩いそげ

榎原峠に上りつめたる所に駕を

居て

山萩の散や日のさす膝のうへ

これとても盛ありけりまんじゆさげ

曼珠沙華遊ぶ鳥さへもたぬ也

訪友人

さては留守むむすびて置れたり

山陰の野に暮いそぐ芒かな

青空や芒に寒いくせがつく

はらむとは芒にやすき言葉哉

荒谷より澤邊といふうまやまで

は、小みち(六町一里の事)四十

里ばかりのよし。立るかゝしの

弓と矢も、心ほそく見ゆる所也。

いとせめて草花多し道下り

錦木をおつとりまきぬ草の花

草花や明るくみゆる母屋のすそ

嬉しさに淋しく成ぬ草の花

笹垣をくどれよ秋の花もらひ

我丈ケにあまりてさびし女郎花

蘭白し蜘蛛のうるまひ憎けれど

鬼灯や旅せぬ人は夢に見す

鯖野村醫王寺のかへさ

えの子草道より下になりけり

碁笥程の芋もちてゆ草の宿

古禪師の手向

芋あぶる烟につれて去れしな

小千谷出雲崎の間に遊ぶ事四十

有六日、長月十八日ふたゝび長

岡に歸り来て舞々庵に入、明れ

ば父の忌日にあたりぬ。

ぬかご焼て我庵ぶりに奉る

草の戸ざしの月夜くは訪ふ人

もおもひたえて

露なれて虫のやうにも寐ざりけり
天の川も虫のなく音も常になる
呪詛で蚯蚓鳴かせず庵の僧
そこらうちいひあはせてや飛蟲
とんぼうや片足あげし鷺のうへ

疎曠老人が山居を訪ふ

露寒し我足あとを又歸る
めらくと煙かゝるや露の上
山にある家のやうなり露の間
露ちるや朝の心のまぎれ行
夕つゆの梢そろはず道の隈
重厚老人に訪はれて

寐て御座れ苔の朝露まだ寒し

編中

露置や我も草木にいつなりし

光堂

露の身に明りさしけり堂の内

母喪中

北の岡山に葬り奉れば朝くそ

の所の霧を分て

置露にいつ迄へるぞ墓の土

一戒ぼとけのめぐりの日、矢越
の崎のこなたに舟がよりして、
念佛となへぬるに、

見るのみ歟霧の雫を膝のうへ

霧雨や白き木子の名はしらす

緒逸春翠素菊を供して天王寺と

いふ山里に分入

霧雨やあまりに低き木のうつぼ

わにのすむ大磯の根と呼べき、

犀濱四十里許の間、裾にゆくゆ

く、浪うちかけられて、

秋風のさても明るき寒かな

あきかぜや白き雀をけさもみる

(右二句の季語を別本には共
に「朝霞」とせり)

秋風や寐よとの鐘はいつもつく

庵びらき

摺臺をのぞきにおはせ龍田姫

門馬より早池峰を望て

晴きつてお寒からふよたつ田姫
菊を見て年寄たまへ龍田姫

角力取の宿は浅茅と答へけり
いなづまやあすは旅する人の来る

横はまにて廿七夜の吟

八月もうら崩して啼千鳥

秋立やうすは萩萩の葉にもおと

らで

三日月や世捨人らが立さわぐ

三日月や風にふかるゝ尾長鳥

三日月を見にこそ来たれむふく

乙彦すけひら等に伴れて、杖の

むく所にあそぶ。

砂山も道ありけりなはつ月夜

雨 十四日

ぬれながら月の使に來る月か

清光に乗じて吟歩するに、およ

んの濱も見えわたりて、

名月の夜にも炭やく煙かな

名月や人の白髪の寒かりし

松窓獨坐

名月はすゞしき月のにほひ哉

(別本「すゞしき昔」)

書懷

名月や病に富る影法師

直江津の三よきの月をひとり

くくにあてゝ見んとて、特背の

日たどり着ぬ。あくるあした潮

の嵐、旅やかたの窓に吹つける

より雨ふり出ぬ。夜もふる。ひ

とりにしてすむ、石海とゆづる

となり。

雨の神磯歩行する名月歎

枯木ほど更るものなしけふの月

六十に四つをそへたる良夜

命なり月見る我をくふ蚊まで

今年の良夜は、兒孫をそばに置

て月見るも、おろかにたのしく

て、

旅寐せば月にもあはじ葎の戸

先人手づから庭裡に数株をうつ

し植て、とく繁陰をいのり申さ

れしは、二十六年のむかしなり

けり。殊に雪のあした月の夕は

此君ならでも、これに對して視

をならし盃をあげたまはざる事

なかりき。ことし文中の九日

千秋のかたみを殘してなくなり

給へ(ひし)が、吹風置露も身に

しまてたゞ哀とのみ覺ること

ひ、

名月や親の位牌を松の上

分外にまたせて今宵月は西

月嬉し乳房はなれし子の心

去年の旅寐に、老が身はあすを

もたのむべからずなど、人につ

ぶやきし事ありしが、

死なぬ心今宵の月に見られけり

仲秋無月 二句

月やこの芙蓉も持たずくもる鹿

月に降ておのが哀となる雨歎

山家によどりて

祖母ひとりいさよふ月を見ざりけり

十六夜の闇や至極に念の入

十六夜の明^{あき}て聞ゆる鳴子かな

さす月の寐所やすき雀かな

五智にて

住ばこゝ椎の風折月さして

なる音は添水なるべし月の中

月代はかならず吹よ根なし風

よんべ寐しころにもなりぬ軒の月

かけのぼる脊戸山あれや秋の月

松のなき世ならば何とあきの月

浪よけの合歡刈分よ秋の月

十七回忌

つもる秋親の白髪に似る斗

すむものゝかぎり盡せり秋の水

さむしろや秋の戸口の日南水

關守が棒の先なりあきの山

朝寒や弱檜^{ヤブヒ}に墨をうてば散

摺上川

梁守の夕寒つのはなしかな
待もせぬ月や夜寒の黍どころ
秋寒し片空かけて山の形
松竹になる氣もうせる野分かな
大はま英里がもとにありて

稗貫の神は何神野分ふく
野分ふく空もせまれり山清水

平湯にて

鹿の聲潮くさくもなりにけり
今朝も寐て行か萩の鹿臭き
鹿の聲風より月の出る也

さかしきにうら表なき會津嶺の
紅葉ふみ分るのみにて

小男鹿や里へとどかぬ聲を持
行くて

水音と鹿に又逢ふ山路かな
風の鳴突はづされし夕かな
さし餌して鶉に秋をぞかたれける
鶉なく野を片脇に水見舞

酒田高野のはまにて

吹うらとこゝらはなれず浪の雁
我ものとさわげや雁の九十月
日のさしてとろりとなりぬ小田の雁
わたり鳥鳥の海には灯のとぼる
君が代の千代の數かも稻雀

梅園に申す

かけす鳴ば山越す頃とおもはれよ

仿燕川

それとなくかゝし立たし向ふ山
矢に羽をほしげもなくて立かゝし
案山子より日のさし初てたゝへ水

長岡の東けへ白といふ里に入

燒帛にしめくとふるしぐれかな

四ツ谷の里を過

麥蒔て冬にしてあり小家の秋

最上川のほとりにすむ龜年がも

とにて

稻舟のいねともいはぬあるじ哉

川稻の花をさまりし月よかな
稻たんとつけて短し馬の首
鐘鳴らす秋はどこでも稻葉山

老婆が七日くの花も、呼ばも

て來る四五野の農家もありて、

稻かけて菊の日遠し垣隣
佛にも初穂といふか木綿所
山かけやくゝすむ人の木綿もふく
寐冷せし宿や紫苑の片なびき
大風の紫苑見てゐる垣根かな
葱苡仁を植し母なし芙蓉咲
しのぶの奥にて

水はやし龍膽など流來る
こまぐと穗にこそ出れ川原麥
からす瓜そもく赤きいはれなし

拍崎にありて(別本「長月四日」

と冠す)

九日にはあはゞ黄菊の寺泊
入るな月夜明ぬうちはけふの菊

あたゝかに見ゆるものなり菊の花
赤いとて淋しがりけりきくの花
雁などをこころす家さへきくの花

老 躬

ともすれば菊の香寒し病上り

出門口號

成美は題目にひたとかたぶき、

巢亮はやく酒に酔ふとか。道

彦は向島に隠居すとも聞ゆ。

きくの秋白髪くらべにむさし迄

我腰につけたる朝ぼらけ(蝶の

銘カ)に、俳諧の古人達を勧進す

ることありて、

置露の菊勸進に出ばやな

ある人の家にて

旅するか暦のうへのきくの花

名取郡のみちのかたはらに人待

貌の小家あり。

田の畔に菽のかはりかきくの花

馬の尾も暮行九月九日かな

旅にしあれば椎の葉にも、と
ありしむかし人の草枕ならね
ど、老ては物にふれて心細き事
のみぞおほかる。

筥の飯も我家ならず後の月
なぎの花こんにやくの花後の月

高館十三夜

名残見せて月はむかしにさし向ひ

水張の菅家の像も十三夜

米山齋

蕙の葉はおそらく赤し茶屋の茶は

もみぢせぬ所はあれど夕木玉

酒 田

熱海から來し人のいふもみぢかな

散覆の實鳥もひらふに子も拾へ

覆實はむ鳥の中よりなく鴉

堂守が茶黄迄くらふからす哉

草の戸や末枯しらぬ水の味

日は西になりぬ袖味噌の釜の影

椎 谷

一曲り出て荒海や落し水

この郡は鳥海山の北にひろがり

て、はじめの秋も雁の來さうな

けしきをふくめり。

からころと砧も初夜由利の空
橋に火かけさす家の砧かな

筥館の装は九月のけふ、霞の先

がけをまたで、

初雪や御難の餅の過し今朝

月をさへ先へ廻して秋のゆく

行秋を鴨は迎に來たさうな

起しても又臥すきくや九月盡

冬の部

十月や日の暮る日の梅の花

初冬の開引はへて安達太郎根

龍膽はどここの山根の初冬ぞ

冬來たぞ山路の菊にもらひ泣

(別本「草庵を出て米澤へ行途
中」と前書あり)

連磨忌や雨天の入汁の中
鶴龜に見せたまきのや夷講

翁忌連夜

墨つけて翌日を待べし旅衣

十二日

旅のあはれ手向せうものはせを佛
淋しさの冬の主かな我佛

翁の日は朝とく起たれど、何を
かせん、橋つむさへものうくて、

しぐれ待のみのをのゝえの朽法師
山人は木祭すらし初時雨
佛は軒のあやめのはつ時雨

奔柄即興

菊の日のきくより白きしぐれ哉
翌日もふるとてけふも降時雨かな
とにかくに篠家はむすべ時雨人
時雨雁箕手にならぶ時もあり

下紐の關を西に出て

しぐれてや大分見ゆる櫻の木
ひと時雨するや素堂が嫁菜迄

門を出る時

いつの旅もしぐれさそはぬ事ぞなき

此君亭

しぐれけりほち／＼高き竹の節

秋の別をきのふ吹送りしが、け
ふもやまず。

月越しの松風ぬらすしぐれ哉
こがらしの乾にさりぬ世捨人

はこだて

木枯のこりよとばかり旅寐ふく
初雪や晝ふるものとおもはれず
みなこもる冬とてもなし初瀬の里
なき人の来る夜近かれ冬籠

米澤高畑にて

飴つゝむ店の木葉も冬げしき
白雲の濁る日もある落葉かな

木葉とはちる頃の名か木葉とは

小坂主は風もひかぬやちる木葉

何がし(別本「北枝」)の集に、角

つゝむ越路の牛の寒哉、といふ

句を此國にありてふとおもひ出

ぬ。

角つゝむ牛を見やうぞ散木葉
梢の木はまだなくならす柞の木

よきことは言葉すくなし歸花

枯てこそ忘れ草なれわすれ草

出雲迄里はいく里枯尾花

萩芒従弟のやうに枯にけり

枯蘆やひだるき我に猶みゆる

枯蘆の倉相に明るる月夜哉

冬草やはしごかけ置岡の家

田に麥をまく國へゆけ鳴鳥

白魚のとれぬ咄しや水仙花

水仙に花なき里の小鴨かな

いたつきの癒るを待こと五日は

かり、太田の人／＼に案内せら

れて足利へ行途中

くだら野の鶴にもまけじ足二本
親の日の朝日を拜む枯野哉
鯉一ツ来て見劣るや遊ぶ魚
花をふむ鳥よりにくし鯉の面
水鳥やこんな奥には菊と家
水鳥の背にかゝれり暮の波

飯坂春翠が家

山水や鴨の羽色に流れこむ
月の夜をきたなくするな鴨の聲
寐ることをあまりきらひな小鴨哉
尻ざりに鴨見て入ぬ門の口
青竹のそなた表や池の鴨

おくの海舟中

錢百で買れうならば波の鴨
雁鴨の日さへ短く成にけり
冬三月折角をそべはま千鳥
編笠を着た人寒し千鳥より
はまの子は正月待よ鴨千鳥

湖のあけばの覗けみそさゞの
齒のぬけし今朝ともしらずみそさゞ
みちのくも出羽の埃、湯原にて

山風の吹出口なり冬の鳥

朝茶のむうちは居よかし冬雀

芭が嶋を北にみる所は

小鳥井の小磯といはめ霜日和

馬の目の哀げもなし霜日和

栗生津のやどり

寒いはづ彌彦の道を軒の下
家ありと聞も寒しや山の陰

建帆の来るよりさむし行姿

竹の葉の世に美しきさむさ哉

奥の海

寒いにもよい程があり杵枕

宿かれば木綿の實をふむ寒哉

寒空や筏にのせし鍋の跡

雄鳥の夜又もつめたい目にあふた

結塵在人境

沓つくる家かと寒くとはれけり

赤湯にて

山鳥のおのが裾野も雪ふりぬ

雪といふ日の差別なく降にけり

降雪の太山橋は高くあれ

菓居が身まかりしよし、きよが

もとより文こしけるに驚て、

けふよりや佛をつくる雪と見る

芋澤といふ山里にて

なけば名の聞たくなるや雪の鳥

むかし繪を見て

尻鞘は誰やら雪の鈴鹿越

そも漁者の短艇にひかれ、閉鴨

に伴ふは、詩つくる人のうらや

むひとつものしぬ。中にも獨

釣寒江雪といふはよき詩のよ

し。嵐にへだてられて出羽の國

矢代峠の麓の里にあること二

日、葦簾を押して戸外を見るに、

弁の音聞なる谷にひびきて、木

間に暮いそぐ影は、世に繪がき

残したるゆかしきけしきなり。

雪に樵る翁もひとり衰と笠

きのふにも似ず朝日はなやかに
さしのばれば、おなじ宿りを出
るに、駕もかなはて、

負れても足する雪の桂橋

橋の名をかしけれど、寒く
くるしきは負ふ人にもまさり
たる老が身なるべし。

彼は来る人、我は行人。

出ぬけたる權ながらに小笹原

雪車負ふて歸るにしりぬ遠い道
荒神の松も買れぬみぞれかな

みぞれにはさせる句もなし山の坊

山の月蔽こぼせし貌もせず

落馬しておもしろげやむ蔽哉

消まいぞ蔽の音がうそになる

鏡氷る俊恵が寺の寐覺哉

未練とはこれらなるべし薄氷

山近くあればおもふや駿鳥

それ鷹に拳見せけり西明り

盛岡に久しくありて

曆書 田山の冬も今少し

(別本「田山はめぐら曆の出所
をいふ」と題書あり)

冬鹿のあまり近きぞむとくなる

木兎曳の身にも大事な月日哉

柴漬し河や家より少し北

柴漬の沈むをのぞく小舟かな

斧柄と名づけて僑居にうつりし
時

折柴のなほ細かれや爐の煙

あくるあした

寒けれどたのもし月のもりし跡

櫛の火に影なく成ぬ壁の月

庚申の夜に逢ふ寺や櫛明り

宮古嶋にありて

大切な埋火一ツかりの宿

埋火といふ名をもてり屋ひとつ

鎌倉の世を先づおもへはかり炭

風ふけば降こむ雨や炭けぶり

草蓆をとふに、一間なる所に上
を着て、殊勝におこなひるを、
しばらくこなたに待て、

いたゞいて御文置間やはしり炭

衾着よ、とや峯の松

多竹、人をして野ならしむ。我す
み家にとゞまる一職法師に贈。

ふすま着てきけ鶯のありく音

米澤途中

餅祈る神も有げに遠小里

足利學校

ふむまじよ冬の齊もむかしめく

南にきかしく立るを七面とい
ふ。根山のなだらかにひろがり
たる上より人すむ家あり。少し
下りて商家背樓に十字街をなせ
る所、すべて山の上といふ。

すめば住七面の冬を背戸の口

針に緒を長くつけたり冬の宿

遊ぶ日は茶賣になしや冬椿

寒月や御鷹の宿もするあたり
寒月は涙こぼさぬ照やうぞ

風入のころを

師走菜をめしにや山を出る佛

師走中の九日三昧にて二句

よる浪のこゝぞ曆の軸はづれ
降雪を仕事にはくや懸り船
寶ほどはありとも見えぬ移かな

節分の夜

折人は鬼の子にせん梅花
慮外なりなやらふ宵の足たらす

なには人の文を得てうらやむ事
あり。

住よしの岸に行てふ年わすれ

病知とたらす水原より青(?)窓

に歸りて、東職文仲夢雨の人
くになすめられて、

死ぬとしを枯木のやうに忘れけり

年内立春

佐保姫につめたさかくせ年の内

むさしとむつとの二法師、喜年
が別荘にうつりて、

年をしむ日もよき程ぞ六くさの家

篤館をのゝえ

いく度かあぶる硯も年一夜

どう聞て見ても懸なし除夜の鐘

雑の部

出羽行脚のころ

橋姫のひとりはあれよ最上川

彌彦神社

東の間にかはるや風のうら表

尾花白阿があるじせる遊筋に日

のかたぶきて

鯛に手をさゝれにけりな外が濱

我をはじめとして

伊詣師栢の柿の帯ばかり

ひぢ曲敷

見よがしに青き實のあるものゝ憂

所思

我とても 暈はく烏賊の迹所

舟中

氷雨降りし雲をさまらず最上河

喪中

星となりて夜は見えたまへ母の影

占籍をもろこし人は遣ひがたき

やうに申はべれど(別本此文の

前に「撫松樓迂翁壽詞」と題せ

千代の數貝まゐらせよ伊勢の蟹

松窓乙二發句集下終

跋

數の堂塔をつくり、あまたの僧尼を供養したるをさへ、無功德と答へ給ひしは、放慢邪僻のこゝろを破斥して、無作の大善根にみちびくはかりごととなん。あはれいづれのみちにまれ、こゝろざしをたてゝ、高きにのぼりみなもとをさぐらんと欲する人は、この垂辞をよくよく肝腑にしまして、修行すべき一大事の因縁なりけり。松窓はわがはいかしの道にはゆゑしき博士にぞおはしける。されど一句つくるごとに、同盟あるは社裏の人々々に批評させてのち、稿を脱することつねなり。こはさらにちりばかりの魔心なく、無爲湛然のたかきさかひにあそべる、たふとき心がまへにあらずや。その世にいませしをり、月をうそぶき、花に酔ひ、鳥をうらやみ、雪に耕し、あるは伊達の大木戸に客を送り、つゝじが岡に人におくられし藻思の、あせみの露のかわきやすう、浮雲のあとなくきえむことを口をしがりて、櫻木にゑりつけ、なにがしが文庫にをさめたるは、これもまた例のやまひのうとましうて、無功德のいましめをふかくまもらんとおもひかまへたる人達のすさみになむ。

默榮主人誌

日本橋四日市廣小路

桂林堂

東都書肆

上總屋利兵衛

同

物主衛

